

## 生物の存在論と人工物の存在論

中山 康雄(Nakayama, Yasuo)

大阪大学大学院人間科学研究科

---

本発表では、拙著『現代唯名論の構築』(2009) で提案した四次元メレオロジーの形式的枠組みを用いて、生物の存在論と人工物の存在論について論じる。

四次元メレオロジーとして生物体を記述すると、通常の物理的物体にはない特性が現れてくる。例として人間について考えてみよう。個体としての人間を私たちは、時空的連続性を基盤にして個別化できる。そしてそれは、誕生以後の人間を考えた場合である。しかし、胎児と乳児は時空的に連続している。また、胎児は母体の中にいるので、胎児と妊娠中の母親にも時空的連続性が見られる。すると、妊娠の期間では、三重の個体が現れる。胎児、母親、〈胎児+母親〉という三種類の個体である。ここで〈胎児+母親〉という個別化に注目し、 $C_0$  氏の祖先を時空的連続性という基準のもとにたどってみよう。すると、母系の家系がひとつの時空的連続体としてとり出されることになる。そして、その母系家系の最大融合体をひとつの個物として考えることが可能になる。そのような個物は、 $C_0+C_1+\dots+C_n$  というタイプの個物であり、「 $0 \leq k \leq n$  となる任意の  $k$  について、 $C_k$  は人間であり、 $k \leq n-1$  のときには、 $C_{k+1}$  は  $C_k$  の母親である」が成り立つことになる。また、女性は  $A_k$  で男性は  $B_k$  で表し、逆に、 $A_0$  の子孫全体を融合化していくと、例えば  $A_0+(A_1+B_1)+(A_2+A_3+B_2+B_3+B_4)+\dots+(A_n+B_n)$  で表されるような時空的連続性を保った融合体を得ることができる。

人工物は、生物とはいくつかの面において異なっている。しかし、並行的な面も存在する。同種の人工物のクラスを本発表では、「人工種」と呼ぶことにする。ここで、自動車という人工種について考えてみよう。自動車は、ある辞典(デジタル大辞泉)によれば、「原動機の動力によって車輪を回転させ、レールや架線を用いなくて路上を走る車」である。このように自動車は、動力の発明を前提にしている。1765年にワットが蒸気機関を発明し、その4年後にはキュニョーが蒸気自動車を発明している。そして、1876年にはオットーがガソリンエンジンを発明し、その11年後の1886年にはベンツがガソリン3輪自動車を開発し、ダイムラーがガソリン4輪自動車を開発している。このように、自動車は動力で車輪を動かす構造が基盤となっており、この構造的同一性を基準として個別化されている。また、現在に至るまでにさまざまな改良がなされており、ある種の構造的特性は一時期に流行してその後消え去っていったようなものもある。このように、自動車は歴史をもった人工種であり、個別の自動車の構造的特性の中にその形成の歴史が内蔵されている。